

名古屋大学附属図書館 研究開発室

LIBST Newsletter

NAGOYA UNIVERSITY LIBRARY STUDIES

No.3 2003 (平成15)年10月1日発行

〒464-8601 名古屋市千種区不老町 TEL(052)789-5699
URL http://www.nul.nagoya-u.ac.jp此ノ書、猶存ス。噫^{アア}

塩村 耕

*

こんな本があった。名大附属図書館書庫（神宮皇学館文庫）で見つけた『地獄物語』という写本で、久々に熱中して一気に読了した。独りで楽しむのはあまりに惜しいので、図書館員の方々と月に2回催している、古典籍の取り扱いについての勉強会「古書の会」のテキストとして輪読も行っている。おそらくいまだ世に知られざる奇文学ではなかろうか。紹介のために、現在編纂を進めている神宮皇学館文庫書誌目録の生データを示しておこう。

『地獄物語（ジゴクモノガタリ）』（請求記号：神皇289.1-2）写大1冊 原装 44丁

書名の備考 書外題右下副題「東行日記附録」。内題「東行日記附録 地獄物語」。**編著者** 世古格太郎（延世）

成立 序跋なし。奥書「これに漏たる奇話もあまたあれと或ははかり或は東行日記に記したればこゝには省けるなり／万延元年庚申の神無月の末より筆を起し霜月の初に記し畢りぬ」。本文より、著者は紀州藩家中で伊勢人、江戸赤坂辺に滞在、のち赦され帰国した人。『南紀徳川史』によれば、安政の大獄に連座した紀州藩関係者は唯一人、世古格太郎のみ。よって著者と推定。世古格太郎は勤皇家、伊勢松坂の酒造家で豪富、紀州藩御用達として禄を

受ける。維新後、宮内権大丞等を歴任。明治9年没、53歳。

自筆稿本。1860 **内容** 安政

の大獄に関して「青山の獄」のち「浅草の獄」に禁錮された著者が、獄中生活の見聞、同囚や牢番より聞いた珍談奇談を書き綴った雑記随筆。

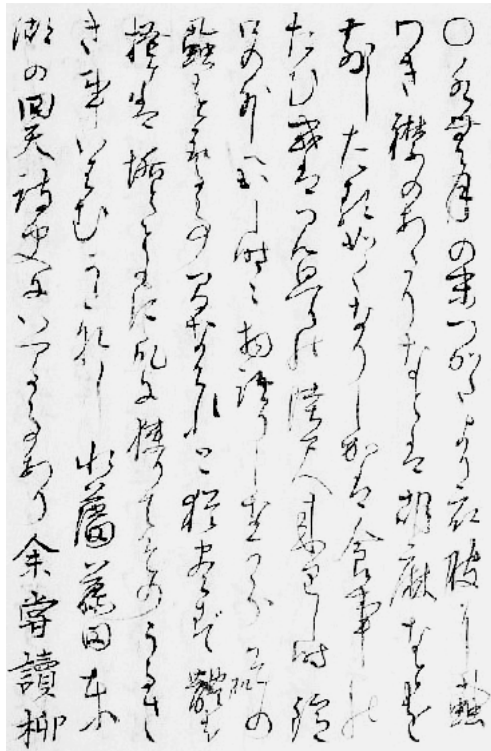
蘭医森川鞏斎より厚遇を受けたこと、浅草の卜者山口千枝の話、夥しい虱の話、材木屋須原屋角兵衛（書林須原屋茂兵衛の一統）の手代長七の豪遊譚、獄中の読書、勝麟太郎の話、同囚の修験の語る江戸に於ける卜者の上手のこと（第一に根岸の青雲堂、但し故人、第二に浅草の山口千枝、第三に芝神明前の白龍子、但し親の赤龍子よりも劣る）、二条左府公の公達寛斎（三条前内府の猶子）のこと、火事の際の獄の「開ケ放し」のこと、浅草の獄中で将棋の名手（実は将棋名人大橋宗桂の子）と将棋を指した話（著者はかつて浪華で平塚瓢斎と将棋を指したことあり）、獄の魁（牢名主）と亜魁より古今三鳥と諷刺鶏について問われた話等。訂正書入多数。**備考** 共紙表紙紙綴本。本文1丁目半ば破損。巻頭巻末に草稿各1紙あり（内容は本文と重複）。正価金45円、物品税金9円の古書販売ラベル。



Contents

此ノ書、猶存ス。噫	1
甦る地域空間 - 尾張と美濃の近世・近代 -	3
伊藤圭介と金鯢と伊藤次郎左衛門と	6

伊藤圭介生誕200年記念展示会にむけて	6
伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会のご案内	8
彙報	8



『地獄物語』自筆稿本の筆蹟

ちなみに本書は国書総目録によれば孤本であるが、外に、名大本が戦前個人蔵であった頃に転写したと思われる写本が東大史料編纂所に、また別の自筆本が東北大狩野文庫にあることがわかっている。実は本書は、伊勢松坂での捕縛、江戸への護送・下獄より、出獄・帰郷までを事細かに書き綴った『東行日記』(狩野文庫蔵)の附録で、そちらには更に詳細な記事が見える。たとえば、浅草の獄(病囚が収容された「溜め」)に入る前に、牢番の忠告により、牢名主への「土産」として金10両弱を紙に包んで口の中に含んで行った話、自分の直前に評定所で死刑判決を言い渡された吉田寅次郎(松陰)の様子(「其人短少の男子にて、背かゞみ容貌醜、色黒く、高鼻、痘痕あり。言語爽かにして其形状は至て穩に見えたり」)、等々である。

この世古延世のすごいところは、尋常ならざる苦境にありながら、自らを客観的に、時にユーモアを交えて淡々と描いている点である。歴史上、このような非凡な「眼」を備えた人間が稀に現れる(偉大な文学を創出し得たのは、そういう人々ではなかったかと私はらんでいる)、その闊達な筆蹟もあいまって(書影写真参照)、この延世という人物には強く心が引かれる。古書探索の妙味は、

このような素晴らしい古人との出会いにあるとって過言ではない。

* * *

つい最近も、こんな本があった。数年来、全資料調査に没頭している西尾市岩瀬文庫でのこと、『元宝正享町触』という、元禄より享保年間に至る江戸の町触を集成した写本が出てきた。その巻末に次のような識語が朱で記されていた。

此一帖於瀬名氏借得命甥杉田信義写信義既没此書猶存噫

庚申(寛政12年=1800)秋日 杏花園(朱印「杏園」) 杏花園、すなわち文人として名高い蜀山人大田南畝が、甥の杉田信義に命じて写させた本とわかる。そこに「信義、既二没ス。此ノ書、猶存ス。噫(アア)」とある。短くも心打たれる文言ではあるまいか。

この南畝という人は、良い識語を残してくれる人で、外にも同文庫に南畝自筆の『夕霧廓文章・巷春柳五株』という富本節の浄瑠璃の写本があり、そこには天明6年(1786)の南畝の書写識語と、その7年後に書かれた、

此書妾賤遺匣中物也

癸丑(寛政5年)初秋 巴人亭書

という短い南畝の識語があった。つまり、これは南畝がお妾さんのお賤(しず)さんのために書き写してやった本で、お賤さんが亡くなった後、残された手箱の中に本が大切にしまってあるのを南畝が見出して、感慨を催しているのである。おそらくは涙とともに。

人は死んで書物を残す。逆に言うと、書物の中には人は生きている。非常なる古書愛好家でもあった南畝先生が、わざわざ書き記してくれたこれらの感懐には、そういった事情をしみじみ理解した人のもつ味わいがあらわれている。すなわち、書物を通して死者を思った南畝が、今度はその感を後世の人と共有しようとしたに違いないのである。いやしくも古書・古典籍にかかわろうという人間は、この感覚を忘れてはならない、と思う。

* * *

大学図書館のになうべき重要な役割の一つは、以上述べ来たったような、書物が本質的に有している、個体の死を乗り越えた世代間コミュニケーションの具としての機能を、最大限に発揮させることにある。それでは、そのために我々は何をなすべきか。

一つは、地域の文書館・資料館として、適切に資料を

収集し、保存するシステムを確立することである。幸いこの地方は東西交通の要衝にあって、豊かな文献資料が集積され残されている。それら貴重な文化資産に永住の場を与えることは、この上ない地域貢献となろう。

次に、それらの資料について、内容や価値を見定めた書誌情報を集積公開することである。はじめに紹介した『地獄物語』のデータがその一例であるが、新たな時代の古典籍書誌目録・書誌データベースとして、この程度の詳しい書誌記述が必要となる。このようなデータが全国の図書館に完備されて初めて、日本は文化国家と称するに相応しい国となろう。

さらに、研究者のみならず広く一般にむけて、情報を

発信すること、いわば社会教育の場としての、図書館の機能強化である。それは「死」を視野に入れた、世代間コミュニケーションの問題は、一般社会の教養の向上にとって最も適切なテーマであるからである。昨年10月に名大附属図書館で開催した企画展示「古書は語る」及び電子展示は、その一つの試みであった。

大学図書館は単なる「古書の番人」であってはならない。名大附属図書館が、以上のような点において最も先端的な、過激にして愛される大学図書館となることを願っている。研究開発室の一員として微力を尽くしたい。

(研究開発室兼任室員・文学研究科助教授/日本文学)

2003年春季特別展講演会

(地域資料の高度活用に向けて / 2003年3月8日) 講演要旨

甦る地域空間 - 尾張と美濃の近世・近代 -

溝口 常俊

研究目的と近世・近代の地誌

本発表の目的は、近世・近代の地誌、地籍資料という文字情報をデータベース化するとともに、GIS(地理情報システム)を使用してそれらを画像化して当時の地域を甦らせることにある。尾張には、『寛文村々覚書』(1672年完成)および『尾張徇行記』(1822年完成)という優れた近世地誌があり、明治期には全村の地籍帳・地籍図が残されている。また、美濃においては全村を網羅する近世地誌は見あたらないが、皇国地誌としての『岐阜県各郡町村略誌』(明治14年、1881)が村別に豊富な情報を与えてくれる。

この地域を対象とした研究は古来数多くなされているが、地域全体を比較研究した点で注目されるのが、地理学の梶川勇作(『近世尾張の歴史地理』企画集団NAF、1997)、歴史人口学の速水融(『近世濃尾地方の人口・経済・社会』創文社、1992)による近年の大著であろう。梶川は『寛文村々覚書』と『尾張徇行記』を用い、丹羽郡、

尾張西南部(海東・海西郡)、名古屋近郊(愛知郡)別に、戸数・人口、村高・農地、蔵入・給知、商品流通などを考察している。地域別(郡)にその地域を多角的に語っていくという方法、および系統(テーマ)別に論を進めていくといったオーソドックスな手法で研究されている点は参考になる。速水は、同資料を使い、戸数および平均世帯規模の変化、牛馬数の変化、および労働・土地集約化の地域的特性などについて詳細な資料吟味と統計処理を行い、19世紀初頭には平均世帯規模はどの地域においても40-45人の層に集中していることを指摘した。また、寛文から文政時代にかけて牛馬数が減少するが、その代わりに農民家族の激しい労働強化がなされたとし、それを「勤勉革命」と呼んだ。

覚書と徇行記は、各郡における藩政村ごとに、土地の種類別、つまり本田と新田および林野に分けて、その石高、面積、租税額が記載されており、また村ごとの戸数、人口、牛馬数、寺社数さらには助郷の状況、最寄りの町

村までの距離も明記されている。明治時代の町村略誌になると、これらの情報に加えて、領主・支配者の変遷、全作物の種まき時期と収穫時期、およびそれらの収量、民有地価、共有財産、協議費収支、民有船舶・車・銃の数、資産額別戸数、各種職業・労働に対する賃金、学校と児童数等が記されている。また、人口に関しても男女別、出入寄留者別、族（士族・平民）別、および職（農・工・商）別に精査されている。

これら全ての項目について分布図を作成し、それらを比較検討することによって地理学的想像力を働かせ、当時の経済・社会・文化を探り、空間秩序を読みとる作業を行った。その結果、従来の常識とは異なった近世・近代の地域像が浮び上がってきた。二、三紹介することにしよう。

分布図からみた地域像

1. 1世帯あたり家族員数

近年少子化、核家族化が進み、1世帯あたりの家族員数は3人前後である。しかし、1世代前の終戦直後は兄弟数人というのが一般的であり、時代を明治、江戸と遡ればもっと多かったのではと想像していた。それが、現、名古屋市域の町村を対象に寛文12年（1672）と文政5年（1822）の2時点で分布図を作成してみたら、ほとんどすべての町村において、前者では確かに6人を越えていたが、後者においては4人を切っていた。江戸時代の150年間に現在に近いくらいの核家族化が進んでいたのである。直系3世代同居を理想とする日本の家族が、幕末になぜ世帯員数を減らしていったのか今後の研究課題となる。

2. 青物市を中心とした圏構造

徇行記（1822）に記載されている尾張各村の生産物の分布図を作成したら、下小田井青物市（大消費地名古屋に隣接する卸売市）を中心に同心円状に生産特化がなされていた。すなわち、近い村では葉物、瓜などの腐りやすい野菜が作られ、やや離れた村では大根、ゴボウなどの根物、遠くの村では茶、ゴマ、豆などの長持ちする作物が栽培されていた。そこには、自分の村で何を作ったら一番儲かるかという農民の知恵を知ることができる。また、知多半島の多くの村が地酒を江戸に運んでいた。このことから名古屋圏というローカルな大市場の上部にさらに大きな江戸全国圏が張り巡らされていることが伺

われる。米もない水もない知多半島で、盛田酒造を代表とする酒がなぜ醸造されるのか。この問いには良質の米を運んだ海運、溜池の水源となる湧き水が関与していると思われるが、立地論研究の興味深いテーマとなる。

3. 田と畑の分布論

尾張はその東半分が丘陵地、西半分が沖積平野である。そこから東部は畑一色、西部は、そこが日本に名だたる濃尾平野であるが故に、田一色というイメージが強い。ところが実際に田畑の分布図を作成してみると、すべての村が田と畑を持ち合わせているのである。なぜ東部丘陵地に田が、そして西部デルタ地帯に畑が、という謎は次の2葉の図、溜池分布図、島畑分布図（図1）によって、解かれる。江戸、明治期を通しておびただしい数の溜池が東部に、無数の島畑が西部に分布していたのである。特に、水田1筆の中に浮かぶ島畑については、それがあまりにも小面積であるが故に、明治時代の2万分の1地形図には現れてこない。近世の村絵図、明治の1200分1地籍図によってはじめて確認されるのである。水田

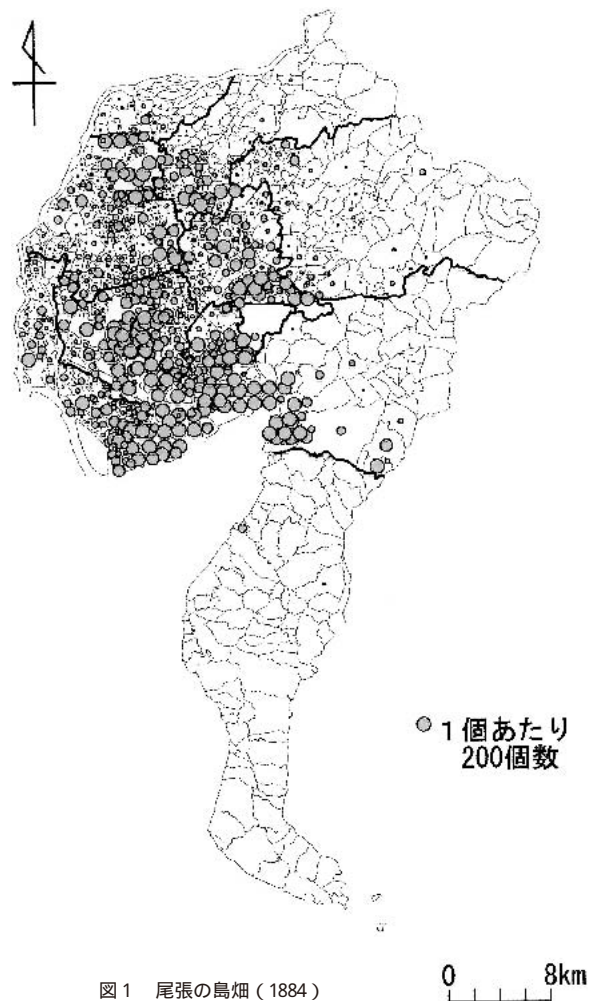


図1 尾張の島畑（1884）

造成の為の干拓地においても短冊形の水田区画の中に相似形の島畑がセットになって作られている。田畑融合の景観がこんな所にも生み出されていくのである。

さて、次に明治初期の景観を示す美濃に移ろう。対象としたのは美濃南部の安八、不破、上石津、下石津、多芸、海西郡の6郡である。

4. 田と畑の評価

江戸時代の検地帳によると田の評価が畑のそれよりも2, 3割高い。例えば、上田の石盛(反あたり石高)が1.8石とすると上畑のそれは1.6石というように2斗落ちを原則としていた。このイメージが強いので、いずれの村においても田の地価は畑の地価を上回っているものと想像していたら、全く逆転の評価がなされていた地域が浮かび上がってきた。それは美濃安八郡南部および海西郡の大水田地帯(輪中地帯)であった(図2)。尾張海西郡立田村でもそうであったように、その島畑は、自家用野菜を作るだけでなく古くより商品作物を栽培し、かなり有効に利用されてきた。綿栽培の分布図(図3)と見事に一致するのもうなずける。低湿地すぎるが故に水田(堀田)耕作は不利で、畑の評価の方が高くなったのである。

5. 人口・牛馬・船車

各種人口についての図が書けたが、その中でいくつか

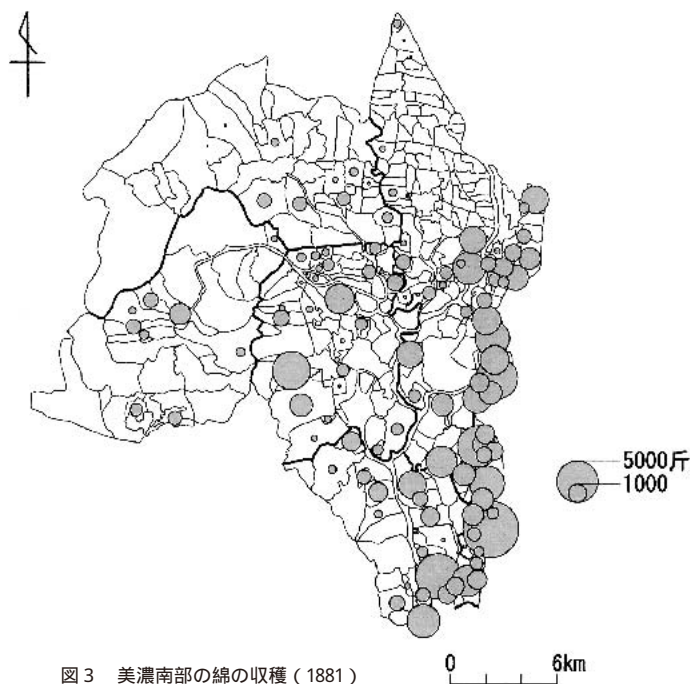


図3 美濃南部の綿の収穫(1881)

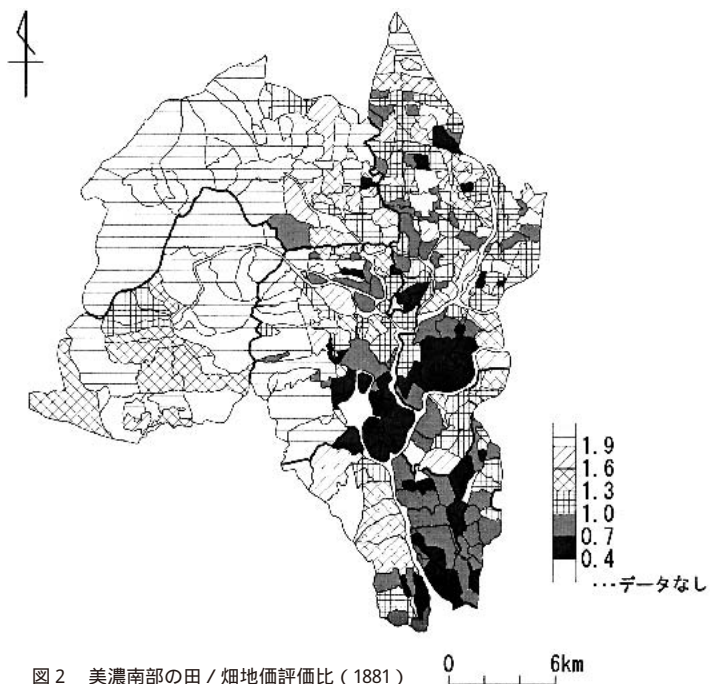


図2 美濃南部の田/畑地価評価比(1881)

紹介しよう。出・入寄留人口の図を並べると入寄留者が大垣や高須の都市的集落に限られていたのに対して、出寄留者は全村から多数出ていた。大垣、高須においてさえ入るより出る者が多かったので、地域全体として他域(おそらくは近隣の大都市である岐阜、一宮、名古屋)への流出超過の構造が見いだされた。職業別人口をみると農民は全村に、雑業者、工・商人は大垣、高須の都市に多くみられ、僧侶が全村でみられたのに対し、武士、医者には都市に集中していた。資産額別戸数を検討すると資産1000円以上の農家の占める割合が高かったのが大垣周辺の安八郡北部の諸村であり、西部山岳地帯および南部水郷地帯に向かうにつれて資産200円以下の低所得者の占める割合が高くなっていった。

牛馬の分布は、西部山岳地帯では牛、東部輪中地帯では馬とはっきり分かれていた。牛は飼料用に、馬は運搬用に使われたと思われるが、共に1村あたり数十頭を抱える村が多く、それぞれの地域での家畜利用のあり方が追究されねばならない。船と車の分布もきれいに分かれていた。船は安八郡南部および海西郡の水郷地帯、車は安八郡北部および不破郡の中山道、美濃路沿いの諸村で使用されていた。船においては漁船、鵜飼船、乗客船などの詳細が、車については荷車、人力車などの詳細が『町村略誌』に載せられているのでさ

らなる検討をしていきたい。

6. 給金

農作業と技術職である大工、桶職人、屋根葺の日当を比較してみよう。後3者の日当がほとんど30銭以上であったのに対し、農業労働者のそれは、安八郡北部を中心に20銭を下回る村が多かった。その中であって下石津郡および安八郡南部、海西郡では輪中低湿地での農業労働の過酷さが賃金に反映されたのであろうか24銭以上の村が多く、中には30銭を越える村も散見された。女性労働としての機織りは、尾西、一宮機業圏に入るであろう長良川沿いの数カ村に限られていたが、そこでの賃金は20銭以下に低く押さえられていた。

これらの職業に対して、奉公人（下僕と下女）の日当

は微々たるものであった。下僕の日当は平均12銭、下女のそれはさらに低く7銭程度であった。地域差以上にジェンダー差が際だった分布図となった。

・今後の課題

以上の分布図作成という作業を通して、文字史料を眺めているだけでは想像もつかなかった様々な近世・近代の地域像を発見することができた。こうした作業を美濃全域、三河、信濃においても進めると共に、都市と農村の関係、中心周辺論、ネットワーク分析、自然環境との関係などを考慮に入れた、より精緻な地域分析を進めていきたい。

（研究開発室兼任室員・環境学研究科教授／歴史地理学）

合縁奇縁

伊藤圭介と金鯨と伊藤次郎左衛門と

伊藤圭介が中央に座った一枚の写真がある。1872年（明治5）3月に開催された博覧会の会場（湯島聖堂）において、関係者一同が集まり撮影した記念写真である。この博覧会は近代的博物館思想を基にした我が国初の博覧会であり、その写真に圭介が写っているということは、彼が日本における博物館の創始にも深く関わっていたことを示している。

このときの博覧会で特に人々の注目を集めたのが名古屋城の金鯨であった。名古屋のシンボルである金鯨も、維新後は無用の長物とされ、名古屋藩から宮内省へ献上されていた。実は記念写真も会場に展示された金鯨を背景に撮影したものである。尾張徳川家に仕えていた圭介は、出品された金鯨をどのような想いでみつめたのであろうか。

その後、名古屋では金鯨の返還を求める動きがでてくる。その中心人物が松坂屋の伊藤次郎左衛門であった。彼は人民惣代として歎願書を作成し、1879年に宮内省からの返還を実現させる。約8年ぶりに名古屋城天守閣に甦った金鯨を名古屋の人々は万感の思いで眺めたことであろう。

二人の伊藤は戦後関わりをもつことになる。名大総長の勝沼精蔵が推し進めた「伊藤圭介先生顕彰会」の再建に際して、役員名簿に「顧問」として名を連ねたのが、代替わりした伊藤次郎左衛門であった。顕彰会は1956年6月に再建され、今日にいたるまで圭介の功績を伝えている。

今回の展示会の準備のなかで見つけた、名古屋にゆかりのある三者？の意外なつながりである。

〔参照：展示会図録『錦築図譜の世界 幕末・明治の博物誌』〕

（石川 寛）

伊藤圭介生誕200年記念展示会にむけて

逸村 裕・秋山晶則

附属図書館研究開発室では、目下、附属図書館との共催による伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会の開催準備を進めているところである。

伊藤圭介は、1803年（享和3）名古屋の町医家に生まれ、水谷豊文ら尾張本草学の影響をうけるなかで、長崎

に遊学してシーボルトに師事した。のち、シーボルトから贈られたツェンベリ（C. P. Thunberg）の『日本植物誌』を『泰西本草名疏』として訳述出版し、初めて我が国に近代的植物分類法を紹介するなど、近代科学を切り拓くうえで先駆的な役割を果たした人物である。今日

に伝わる雄しべ、雌しべ、花粉等の植物用語も圭介の創案によるもので、“Keisukei”の名を学名に冠した日本産植物はスズランなど20種以上に及ぶ。

彼の足跡はそれにとどまらず、尾張で初めて種痘を実施したほか、尾張藩の洋学教育を牽引し、同土とともに医学館設立にも奔走している。これが名古屋大学の前身である仮医学校・仮病院の誕生へ結びついたことを考えると、圭介は、名古屋大学の生みの親ともいえるのである。

明治維新後は、文部省出仕を命ぜられ、東京に移住して主に石川植物園に関係し、東京大学教授をつとめたのち、日本初の理学博士ともなっている。その交際範囲は広く、水谷豊文、飯沼慾斎、栗本鋤雲、田中芳男、牧野富太郎ら国内の学者のみならず、サヴァチェ、マッカーティー、ヘールツ、アーネスト・サトウなども親交があった。享年99歳でその生涯をとじるまで学究生活を続け、多数の著作とともに膨大な資料稿本を遺した。

そのうち、名古屋大学附属図書館所蔵「伊藤圭介文庫」には、圭介晩年の遺稿類188冊が収められている。当該資料は、圭介が名古屋大学の創設に関わったことを機縁として、勝沼精蔵元名古屋大学学長をはじめ関係者の尽力の結果、1955年、ご遺族の伊藤一郎氏から附属図書館へ寄贈されたものである

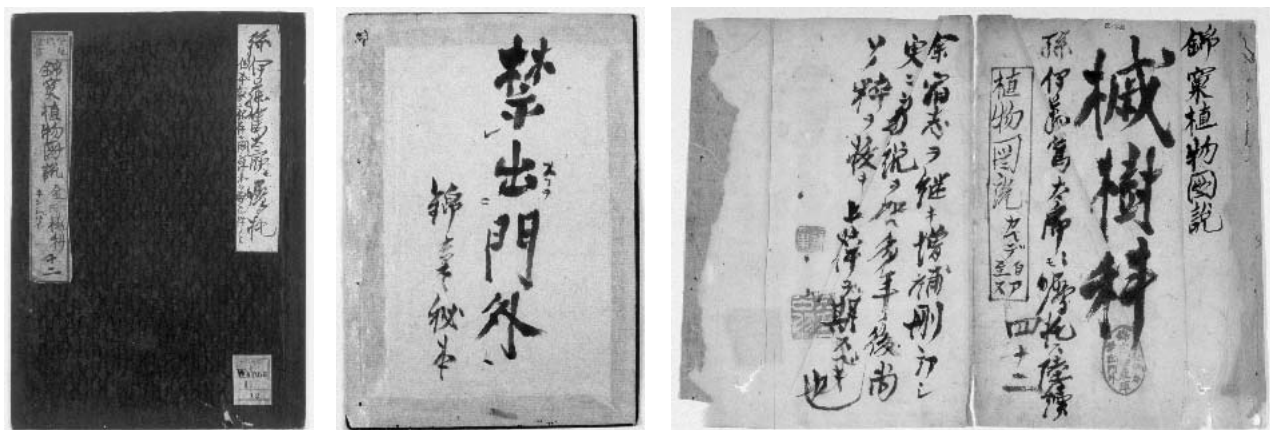
資料内容としては、植物を中心に動物、昆虫に関する圭介の自筆原稿や多彩な細密画が含まれるほか、入手した各種資料、断片、手紙等の「現物」がそのまま貼り込まれているところに大きな特徴がある。そこには、今日では失われてしまった書物の断簡なども多数含まれており、当時の文化世界が凝縮した形で、独特の価値をもつ

貴重な資料群を形成している。

それゆえ、牧野富太郎をはじめ伊藤圭介を知る人々は、ことあるごとに遺稿類を精査する必要を喚起されてきたわけだが、資料中に書き込まれた圭介の(相当癖のある)筆跡が難物であることはおくとしても、洋の東西、時代を問わず博搜された資料世界は、典拠資料の特定だけでも相当骨の折れる仕事であり、容易なことでは認識しがたい存在であった。こうした資料そのものの扱いの難しさから、数多くの研究資料で「伊藤圭介文庫」の重要性が指摘されることはあっても、その原本についての包括的な調査研究、正確な内容把握はなされてこなかったのが実情である。

そこで今回、生誕200年記念展示会・講演会を開催するにあたり、研究開発室がその難題に挑戦することとなった。まずは、今後の研究にむけた土台作りを目標に、室員をはじめ、学内外のいろいろな方のご協力も仰ぎ進めてきたが、正直に申せば、時間的制約のなかで難解な資料に立ち往生し、頭を抱えることもしばしばであった。この間の成果については、展示会からご判断いただくほかないが、いずれにせよ、「伊藤圭介文庫」資料そのものの本格的な公開は、文字通り今回が初めてであり、その豊かな内容を可能な限り紹介し、今後の活用にもつた道を模索できればと、最後の調整を進めているところである。

なお、附属図書館ホームページ上では、すでに伊藤圭介文庫のデジタル画像が一般公開されているが、今回の展示会にあわせ、新たにメタデータの付与及び検索システムなどの機能強化を図るなど、電子展示としての整備も行うこととした。冊子にして2万丁に及ぶデータを全



『錦室植物図説』第2冊の表紙と第1冊の中表紙、第32冊の中表紙である。圭介の字で、「門外へ出すことを禁ず、錦室秘本」「余宿志を継ぎ……上梓を期すべき也」と書かれている。

件処理するには至っておらず、「構築途上」の暫定版とならざるをえないが、伊藤圭介のもとに展開した豊饒な世界の一端をご紹介し、日本における黎明期の学術のあり方についても実感していただければと、あえて公開す

るものである。意のあるところを汲み取られ、さらにご教示・ご叱正をいただければ幸甚である。

伊藤圭介生誕200年記念展示会・講演会のご案内

展示会

「錦窠図譜の世界 - 幕末・明治の博物誌」

日時：2003年10月17日（金）～30日（木）
10：00～17：00（土・日とも）23日（木）は休館日
場所：名古屋大学附属図書館 4 F 展示室

講演会

「博物誌の時代と伊藤圭介」

日時：2003年10月18日（土） 13：00～16：00
場所：名古屋大学附属図書館 5 F 多目的室
講師：磯野直秀（慶應義塾大学名誉教授）「日本の博物誌と伊藤圭介」
土井康弘（国土館大学非常勤講師）「日本初の理学博士の誕生」
杉山寛行（名古屋大学大学院教授）「伊藤圭介と医学」

主催：名古屋大学附属図書館・附属図書館研究開発室
後援：愛知県教育委員会、名古屋市教育委員会
照会先：TEL052 - 789 - 3667 附属図書館情報管理課庶務掛

問い合わせ先：TEL052 - 789 - 3667 附属図書館情報管理課庶務掛
E-mail：shomu@nul.nagoya-u.ac.jp

彙報

2003年

- 2月24日 第10回教官会
- 2月28日 第2回懇談会
- 3月7日～16日 春季特別展
- 3月8日 特別展講演会
- 3月17日 第11回教官会
- 4月24日 第3回懇談会
- 5月12日 第1回教官会
- 6月9日 第2回教官会
- 7月14日 第3回教官会

LIBST Newsletter No.3

編集・発行

名古屋大学附属図書館 研究開発室
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
TEL 052(789)5699